

論 文

ナブラチロワとトランスジェンダー問題
——女子エリートスポーツにおけるフェアネスの行方——

伊 藤 豊

はじめに——レズビアン選手そしてアクティヴィストとしてのナブラチロワ——

1981年、テニス選手としての全盛期にあったマルチナ・ナブラチロワ (Martina NAVRATILOVA) は、自身がレズビアンであることを公表する¹。「己がスーパースターであった最中にカミングアウトした、まさに初めてのスーパースター」² だったナブラチロワにとって、この決断は極めて深刻であり、多大な犠牲と危険を伴うものだった。1980年代は人々の AIDS 恐怖が最高潮に達していた時代であり、大手企業の多くはレズビアンである彼女との関わりを恐れた結果、後援活動から引き上げ、多額のスポンサー契約が解除されたという³。

ナブラチロワのカミングアウトは大きな衝撃をもって迎えられたが、このことは彼女がその後の人生を通して、政治・社会アクティヴィズムに積極的に関わっていくきっかけともなる、極めて重要な転機だった。彼女はテニス界の現役引退後も、自身が築いてきた実績をプラットフォームとして縦横に活用しつつ、様々な言論活動をおこなっていく。ナブラチロワは「40年以上にわたって世界中のレズビアンのシンボル」であり、その存在によって「公共の言論におけるレズビアンの美学と文化を保ち続け」、また特にジェンダーをめぐる発言において「社会の現状に反対する活動」を展開してきた⁴。ナブラチロワは「今日の LGBTQ 選手の多くが生まれる遙か以前に闘いに加わった」⁵ のであり、いまやテニス界の枠をはるかに越え、スポーツのみならずジェンダーや人権などの社会的な争点をめぐって、世界中の人々に強力なインスピレーションを与える一大アイコンと化していると言えよう。

1. ナブラチロワとトランスジェンダー問題

そのナブラチロワが、トランスジェンダー選手の女子競技参加に関して批判的な持論を表明した結果、各方面からの苛烈な批判に曝されたのは、2018年末以降のことである。近年、トランスジェンダー選手がプロスポーツやオリンピックなど、いわゆるエリートスポーツ競技に参加する

事例の増加にともなう、賛否両論が喧しくなっている。特に、人権を社会的な価値観の根幹とする民主主義諸国では、性別を根拠としたエリートスポーツへの参加制約は、一般に緩和の方向に向かっているものの、同時に「トランスジェンダーや性分化疾患（DSD）の女性選手をめぐる問題、つまりは「女性（や男性）という性の境界をどこで／どのように引くのか、というジェンダー概念をめぐる問題」が、しばしば各種の論争において浮上している⁶。もともと出生時点で生物学的に男性（いわゆるシス〔ジェンダー〕男性）であった人物が、トランス女性として女子競技に参加することについては、それがシス女性（つまり出生時点から生物学的に女性であり続けている）選手に対する競技上の不利益、さらにはトランス女性選手が得る不当な利益につながる可能性があるとして、批判的な言論が展開されることもあり、他方、そうした言論をトランスフォビアの実例として糾弾する動きも見られる。

このような文脈の下で、テニス界の大御所であり、またレズビアンそしてアクティヴィストとしても著名なナブラチロワが、トランス女性選手に関する批判的な見解を公表したわけであり、これは賛否両方の陣営にとって大きなインパクトを持つものであった。ナブラチロワの発言は以後も相当な注目を集め続けており、例えば本稿の執筆時点において、Google Scholarで「Navratilova AND transgender」と入力し検索したところ、2019年のヒット数は約310件、2020年は約340件、2021年と2022年はともに約450件、2023年は約440件にのぼった⁷。また2019年7月8日、BBCはナブラチロワをプレゼンターとして、特番ドキュメンタリー“The Trans Women Athlete Dispute with Martina Navratilova”を放映しており、彼女が提起した論争が英語圏メディアにおいて、国境を越えた広範な影響を及ぼしていることは、こうした事実にも窺われる⁸。

他方、日本では上記のようなナブラチロワの活動の側面は、インターネット上の報道で一時的に話題になったものの、それらは実質的には翻訳記事にとどまり、また一般読者を対象とする商業出版物の中で一種のエピソードとして紹介されることはあっても、本格的な分析の対象となることは稀であった⁹。こうした中で、レズビアン選手としてのナブラチロワの活動や功績を論じた日本語による数少ない先行研究として、飯田貴子「異性愛主義に立ち向かった二人のウィンブルドン覇者～ベリー・ジーン・キング & マルチナ・ナブラチロワ～」があるが、当該論文が出版されたのは2000年代の初頭であり、したがって、その後のナブラチロワの軌跡を追うものにはなり得ず、また管見の限りでは、そういった類の研究は依然として他にも現れていない¹⁰。

昨今、トランスジェンダーについては、日本でも取り沙汰されることが増えつつあり、また2023年にはいわゆるLGBT法が成立・施行されているものの、その正式名称（「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」）から見て取れるように、本法は「国民の理解の増進」を目的とした理念法にとどまっており、トランス女性選手の女子競技への参加をめぐる具体的な問題が論争の有意義な深化へと繋がり、さらに日本社会でその意義が広範に共有されるに至った事例は、まだまだ珍しいように思われる¹¹。このような現状に鑑みれば、ナブラチロワの一件は、トランスジェンダーという争点をめぐっての今後の日本の

行方を考えるうえで、極めて示唆に富む先例になるかと思われる。本論文では、トランス女性選手による女子エリートスポーツ競技への参加についてのナブラチロワの持論、ならびにそれが巻き起こした論争を取り上げ、ナブラチロワとその批判者たちの間に生じた主な争点を洗い出しつつ、スポーツにおけるフェアネスとジェンダーの緊張関係について考察したい。

2. 論争の端緒

事の起こりは2018年末、ナブラチロワが自身のツイッターに、「明らかにオカシイ。女性だと自称するだけで女子競技に出場できるなど論外」と投稿したことにある¹²。BBC スポーツはこの直前に、大学教員でトランス女性のレイチェル・マッキノン (Rachel MCKINNON, 改名して現在は Velonica IVY) が国際自転車競技連合 (Union Cycliste Internationale; UCI) のマスターズ世界選手権で優勝したことを報じており¹³、ナブラチロワの上記の投稿は、本件に関してツイッター上で一人のユーザーから質問を受けた際の、彼女の応答の一部であった¹⁴。

女子競技への出場に際しては「何かしらの基準がなければならず、男性器を有しつつ女性として競技することは、そういった基準に適合しない」¹⁵というナブラチロワの発言は、直接的にはマッキノンの勝利をきっかけとしたものであったにせよ、必ずしもマッキノン個人にのみ向けられたものではなく、前提としてトランスジェンダー選手の競技参加をめぐるIOCの方針変更があったことは、まず押さえておかねばならない。IOC 医事委員会による2003年のストックホルム合意声明では、思春期以降に性別変更を望む選手はまず性別適合手術を受け、次に、少なくとも2年間のホルモン療法を受けた後に、初めて競技資格を得ることができると規定されていた¹⁶。

2015年、上記の声明を上書きする形でIOC合意声明が出され、ここに明記されたトランスジェンダー・ガイドラインによって、トランス男性選手は特に制限なく競技に参加できることとなり、またトランス女性については、最初の競技参加の少なくとも1年前までに、当該選手のテストステロン値が一定の基準を下回っていることが求められるようになった¹⁷。この新たなIOCガイドラインはスポーツ界のいわば憲法として、他の競技にも影響を与え、多くの競技団体がIOCの方針に合わせて、自身のガイドラインを整備していくことになる。

ともあれ、レズビアンを含む性的マイノリティの権利擁護のために活躍してきた、世界的な知名度と影響力を有するナブラチロワの上記の発言は、すぐに大きな反響を呼んだ。彼女の見解に共感する人々もいた一方で、本稿で後に論じるマッキノンのように、ナブラチロワをトランスフォビックであると断罪し、強烈な反発を示す者もいた。

ナブラチロワはこうした批判に曝された後、当該ツイートを削除し、「私がトランスフォビックまがいの発言を何かしたのなら、申し訳なく思います——誰かを傷つけるつもりなど毛頭ありませんでした——この問題について、私はもっとよく学ぶつもりですが、しばらくは発言を控えます」と投稿した¹⁸。

3. 論争の再燃

上記のように述べた後、一旦は沈黙したナブラチロワであったが、翌2019年の2月に満を持した形で、本件に関する持論を「トランス選手に関するルールは不正を助長し、無実の者たちを罰する」(“The rules on trans athletes reward cheats and punish the innocent”)と題して、新聞紙上で公表する。本論説のサブタイトルは「自分の名前を変えてホルモン治療を受けるだけで——この種の選手たちがどれだけ幅を利かせようとも——男性が女子競技に出るのはアンフェアである」(“Letting men compete as women simply if they change their name and take hormones is unfair – no matter how those athletes may throw their weight around”)であり、メインタイトルと合わせれば、ここでのナブラチロワの主張がどのようなものかは、おおよそ推測できるだろう。つまり、トランス女性選手といっても、その肉体的な実態は男性であり、したがって彼女たちがどれだけ声高に自分は女性であると強弁しようが、そうした選手の競技参加を認めるルールは「不正を助長し」、他方で競技における性別の枠組みをきちんと守っている「無実の者」としての他の選手たちを害する所業である、というのがナブラチロワの主張の概略である。

ナブラチロワの論説では、上で言及したマッキノンが何度か名指しされており、直接的にはマッキノンへの反論を多く含んでいるが、それは暫く措いて、まずはナブラチロワの持論を紹介する。「本来、揉め事を嫌う人間」と自ら称しながらも、ナブラチロワの議論は相当に挑発的のように見える。自分は本件について、きちんと調べるまでは発言を控えると約束したわけだが、調べが済んでみれば「むしろ持論に確信を持つようになった」とナブラチロワは述べ、このように続ける。

つまり、ある男性が女性になろうと決断して、自身に関わるスポーツ団体から要求される場合はホルモン治療を受け、何であれ競技に勝利し、たぶん小金も稼いで、その後、自身の決断を覆し、本人が望むならば子作りに復帰もできる、ということである。これは正気の沙汰ではなく、不正行為である。私はトランスジェンダーの女性に呼びかける際に、何であれ本人が好む呼称を用いることに吝かでないものの、彼女を相手に競技するのは御免被る。そんなのアンフェアだろう。

ここでナブラチロワが「正気の沙汰ではなく、不正行為」だと糾弾するのは、トランス女性選手の性別が可変的であり、それが肉体的に依然として男性である選手によって悪用される余地が大いにある、という点である。無論、ナブラチロワはこれを、単に想定されうる可能性として語っているわけではない。「何百人もの選手たちが、自称ならびに一定のホルモン治療によって性別を変更し、特に技術よりもパワーが鍵となるスポーツ種目で、男性としての己の能力を超えた栄誉を、女性としてすでに勝ち得ている。」つまりナブラチロワの憂慮は今や可能性ではなく現実

の問題となっており、彼女を痛烈に批判するマッキノン自身も、その「実例の一人にすぎない」わけである。

4. トランスジェンダーとトランスセクシュアル

上記のような憂慮あるいは批判を表明するに際して、ナブラチロワは特に「トランスジェンダーとトランスセクシュアルの選手をきちんと区別」することを提唱している。トランスセクシュアル選手とは、性別適合手術を経た選手のことである。「トランスセクシュアルは性別変更を決意し、その決意を外科的に実現している。つまり、後戻りはないわけである。彼らの数は少なく、競技上の優位を得ることは稀である」と、ナブラチロワは述べる。性別適合手術という肉体的に不可逆な措置を経たトランスセクシュアルは、ナブラチロワから見れば、競技参加の当然の前提となるフェアネスを自らの意識的かつ全面的なコミットメントによって実現しており、したがって、彼らが競技に参加することに何ら問題はないとされる。

他方、トランスジェンダー選手はどうであろうか。ナブラチロワの見解によれば、肉体的には依然として男性であるトランス女性選手が、自らのホルモン数値を当該競技の統括団体が要求する水準まで落としたとしても、筋肉や骨密度や赤血球数といった、生物としての男女の根本的な差異を解消するには至らず、したがって問題は依然として残るといふ。

男性は子供の頃から筋肉が成長し骨密度が高まり、酸素を運ぶ赤血球の数も増える。男女差はトレーニングによって、さらに増大する。実際、男性がそれまで蓄積した利点を取り去るような方法で性別を変更するとすれば、思春期以前にホルモン治療を始める必要がある。そんなことは私にとって、考えられないことだ¹⁹。

出生時に男性であって女性への性別変更を望む選手が、生物としての男女の肉体的な差異を解消したうえでの性別変更を目指すとなれば、そのための効果的なホルモン治療は、本人が思春期を迎える以前に開始されなければならない。そういった選択肢に関しては、予測不能の健康被害が本人の成長後に発生する可能性もあり、ナブラチロワでなくても「考えられない」と答えざるをえないことも、これまた当然であろう。

5. ナブラチロワは「トランスフォビック」か？

ナブラチロワにとってトランス女性選手の存在は、人権の次元で論ずべき問題であるとともに、エリートスポーツ競技への参加に必須の前提たるべき、フェアネスの問題でもあった。確かに、IOCの『オリンピック憲章』は「スポーツの実践は人権である」と定めており、トランスジェ

ンダー選手のエリートスポーツへの参加も、そういった宣言に適う試みであろう²⁰。しかし他方で、「生物学的に依然として男性である人々と競争しなければならない女性にとって、それは明らかにアンフェア」だという（ナブラチロワから見れば自明の）事実も、未解決のままで残されてしまう²¹。

以上のようなナブラチロワの発言は、彼女のトランスフォビックな信条の吐露であると、はたして解釈すべきであろうか。ナブラチロワが上記の論説を発表する以前、同様の見解をツイッターで表明した際に、彼女をトランスフォビックであると最も痛烈に批判したのは、本稿で先に言及したマッキノンであった。「まあナブラチロワはトランスフォビックなのだろう」と、マッキノンはあるツイートで述べ、以下のように続ける。

性器はスポーツにおける身体機能とは無関係……まったく無関係である。男性器を有するトランス女性（特にテストステロン阻害薬を服用している）と男性器の無いトランス女性の間には、何の差異もない。したがって、性器に焦点を当てること自体がトランスフォビックなのだ……さらに言えば、性器が関与するスポーツは皆無である。男性器や陰でテニスボールを打つことは無いし、そんなことがあるわけもない……男性器=男性=身体機能の優位性という点で、男性器に焦点を当てることは性差別的でトランスフォビックでトランスミソジニスティックなのである²²。

こうした極めて挑発的な批判に接して、ナブラチロワが黙っていたはずもない。「私のツイートはマッキノンから怒りの応答をもたらした……彼女は私が『トランスフォビック』だと非難し、私のツイートを削除して謝罪するよう要求してきた」と、ナブラチロワは説明する。「マッキノンからの嫌がらせツイートが矢のように続いたせいで、かなり気分を害した」と述べるナブラチロワは、「私は自分自身や他人のために、人生の大半を不正との戦いに費やしてきた」と、社会正義を目指した自身の活動歴を強調しつつ、以下のように主張する。

トランスジェンダーのアクティヴィストの間で、彼らに反論する人をひとからげに非難し「トランスフォーブ」だとレッテルを貼る傾向が強まっている現況を、私は……遺憾に思う。それは専制の別の形にすぎない。私は比較的タフなので、マッキノンとのツイッター上での応酬でも自分を守ることができたが、他の人たちは怯えるあまり、黙って服従を強いられるのではないかと憂慮している。レイチェル、あなたはトランス問題に関する専門家かもしれないが、人間的には最低だ。攻撃、攻撃、攻撃。もう我慢できない。あなたは議論に応じず、嫌がらせばかりだった。あなたのアカウントをブロックはしないけれども……もう十分だ²³。

6. 論争の行方：そもそも「男性」と「女性」とは？

ナブラチロワは上の引用に続いて「私が求めるのは、フェアネスのみである」と述べる²⁴。トランスジェンダー問題をめぐって、社会の多数にとってのフェアな議論の場が確保されるためには、相手をトランスフォープであると決めつけ断罪するマッキノンのようなやり方こそ、まず改められなければならない、というのがナブラチロワの主張であったが、レズビアン選手ならびにアクティヴィストとしてのナブラチロワの過去の実績ならびに知名度は、ここでは必ずしも有利に働かず、事態はむしろマッキノンの言論によって（少なくとも一時的には）主導されていったように見える。そうした流れの一つの現れとして挙げられるのは、ナブラチロワが上記の論説を発表した直後、性的マイノリティ選手の権利擁護団体であるアスリートアライ (Athlete Ally) が、同団体アドバイザーならびにアンバサダーの地位から、ナブラチロワを即日解任したと発表したことだろう。

アスリートアライはトランス選手の側に立ち、彼らが差別を被ることなくスポーツに参加し競技する権利を擁護する。トランス選手に関するマルチナ・ナブラチロワの最近のコメントは、科学的データの誤った理解に基づくトランスフォビクなものであり、危険な迷信を助長し、さらに差別的な法律や憎悪のステレオタイプや不当な暴力によって、トランスの人々を常に狙い撃ちにすることへと繋がる。我々は、ホモフォビアならびにトランスフォビアの根本原因に、スポーツを通じて直接・間接的に取り組むことを使命とする組織であり、同じゴールを目指す人々とのみ提携し、何であれ誤った情報や差別を助長する人々とは提携しない。このような事情により、ナブラチロワを本組織のアドバイザーボードから即刻除名し、アスリートアライのアンバサダーの地位も剥奪する²⁵。

著名なナブラチロワによる一連の発言を一見すれば、「いかに彼女がセクシュアリティの上でマイノリティであっても、シスジェンダー女性としてトランスジェンダー女性を排除するという構図を踏襲」しており、「結果としてスポーツの枠内におけるシスジェンダー優位……という秩序の再生産を助長してしまうことにもつながりかねない」²⁶という憂慮はなるほど理解できるし、さらに彼女の発言が、トランスフォビクな言論の支持者によって拡散・援用される可能性に鑑みれば、公的団体としてのアスリートアライがナブラチロワを解任したのは、賛否はあろうが一つのケジメであった。ただし一方で、彼女の発言の内容自体が、同団体が断じるほど明らかにトランスフォビクであったかについては、おそらく議論の余地が大いにあるだろう。ナブラチロワ自身にトランスジェンダー女性への差別の意図が（少なくとも彼女の主観においては）皆無なのは明らかであり、むしろ彼女が提起しようとしたのは、ある競技を「女子」競技として成立させるうえで肉体的に必須と思われる要素と、トランス女性選手の女子エリートスポーツ競技への

参加を容認するという判断が、どう考えても両立しえないという問題であった。

上記の問題は、そもそもスポーツにおいて「男子」と「女子」、あるいは「男性」と「女性」を分離して競技をおこなう際に、いったい何がそうした分離の具体的な根拠とされるべきか、という議論へと繋がることになるだろう。この点に関して、ジャーナリストのグレン・グリーンウォルド (Glenn GREENWALD) は次のような秀逸な見解を提示している。

結局、論争の火種になったのは、ナブラチロワがこの問題を提起する際に、男性器という存在を、やや不手際な形で持ち出したことだった。陰茎ならびに睾丸自体は、(マッキノンが選手として活躍した) 自転車競技において有利に働くわけではなく、それらを外科的に除去しても問題にはならない。けれどもナブラチロワの世代の人々にとって、トランス女性であるためには、性別適合手術を受けて男性器を除去して人工の膣と乳房に置き換えることが、定義上必須であった…… (ナブラチロワと同じ) 世代のアクティヴィストにとって、陰茎を有することと女性であることは相容れず、とりわけ金銭や賞や栄光を求めて他の女性を相手に競技する権利に関しては、そうだったのである²⁷。

ナブラチロワにとって、性別適合手術を経たトランスセクシュアル女性は、そうした行為によって「全面的なコミットメント」を示しており、したがって彼女たちを女子競技へと包摂することには、何の問題もなかった²⁸。ただし、確かに性別適合手術は自身の性的アイデンティティを変更するにあたって重大な意味を持つ行為であるにせよ、それに比して、性別適合手術を受けずにホルモン治療のみによってジェンダー変更をおこなったトランス女性選手が、それほど手軽に女性であることを選択あるいは実現しているのかと問えば、そこに安易な答えがないことも自明であろう。この点について、グリーンウォルドは次のように続けている。

(マッキノン) や他のトランス女性は、競技への参加を許可される前に、6か月から24か月のホルモン治療を義務付けられていたが、そうした事実にもかかわらず、ナブラチロワにとっては、(マッキノン) のプロスポーツへの参加をめぐるフェアだと考えられるもの、あるいは意義あるように思われるものは、少なくとも表面上は皆無だったのである²⁹。

ナブラチロワの認識がどうであろうが、性別適合手術という外科的過程を経ていない場合ですら、ジェンダー変更の実現が一般に苦難の道であることは言うまでもない。自身の性別に違和感を持つことから生じる様々な心的葛藤や自殺衝動、家族や友人を失うリスク、ヘイトクライムの標的となる可能性、ジェンダー変更を実現する際の法的な手続きの煩瑣さ等々の様々な問題は、ここで改めて指摘するまでもないだろう。20世紀オーストラリア社会のマイノリティを研究対象とする学者ノア・ライズマン (Noah RISEMAN) によれば、幸いにもジェンダー変更を果たした

トランスジェンダーの人々ですら、「個々人の人生において完全な断絶」を経験した後の「生き残り (survivors)」なのだという。さらにライズマンは、ある精神科医の言葉を借りつつ、このように続ける。

それは「今日は男になろう」とか「明日は女になろう」という類の選択肢などではない。性別を変えたいという衝動は非常に強いはずで、さもなければ、誰もそんなことをあえてやろうとしないだろう³⁰。

おわりに——ジェンダー・バイナリーの黄昏？——

ジェンダー変更が当事者にとって最も真剣かつ深刻な行為という上記の認識は、無論、ナブラチロワを激しく批判したマッキノンも共有している。トランスジェンダー女性選手は競技で成功した後に、望むならば男性に戻って、父親になり子どもを持つこともできるだろうという、ナブラチロワの挑発的な発言に対して、マッキノンは以下のように反論する。

(ナブラチロワ) はトランス女性に対する古びたステロタイプとスティグマを弄し、我々を単に女性のふりをしている男性だとしている……彼女の議論は捏造とファンタジーとフィクションで成り立っている。彼女が妄想しているのは、架空のシスジェンダー男性がトランス女性のふりをして、心理学者や医者を騙しホルモン療法を処方させ法的変更を承認させる過程を経て、現在の IOC 規則で義務付けられている、最短でもテストステロン値の12か月の抑制期間を待って競技に出た後、気が変わって「子作りに復帰する」というようなことなのだろうか？……2003年の IOC 合意以降、そんなことは一度も起こっていない。そんなことは今後も決して起こらないだろう。これはトランス女性に対する不合理な恐怖であり、まさにトランスフォビアなのである³¹。

ここで注意すべきは、マッキノンが上記で「架空のシスジェンダー男性」と断罪するものが、彼女にとってあり得ない、あるいは、あってはならない存在であり、その点でナブラチロワの立場と重大な接点を有しているという事実である。ジェンダー変更は外科的な措置を伴わなくても、依然として深刻な決断であり、後戻りができないはずの過程でもある、というのは、実はマッキノンの発言の前提でもある。だとすれば、そうした態度を示すマッキノンと、性別適合手術に「全面的なコミットメント」を見出すナブラチロワは、(外科的措置の有無にかかわらず) ジェンダー変更によっていったん選ばれた性別は絶対であるべきと暗黙に前提している点で、実は両者ともに同種の、いわゆるジェンダー・バイナリー (gender binary あるいは gender binarism) に陥っているのではないか。

ナブラチロワとマッキノンはいかに非難し合っているものの、実は両者ともに競技スポーツにおけるバイナリーな性別区分を絶対の前提としており、そのうえで、一方は女子エリートスポーツという既存の枠組みを死守し、他方はそうした枠組みにトランス女性の立場から食い込もうとしている、とも解釈できよう。つまり、この二人の論争は一見、トランス排除派 (trans exclusivism) とトランス包摂派 (trans inclusivism) の対立の形をとっているが、そこには両者に通底するジェンダー・バイナリーを根拠とした、「女子」領域への参入をめぐる争いも垣間見える。

先に引用した通り、IOCの『オリンピック憲章』には「スポーツの実践は人権である」と明記されているが、他方で「個人がみずから定義する性的指向ならびに性自認は、当人の人格に不可欠なものであり、自己決定や尊厳や自由の最も基本的な要素の1つである」という認識もまた、いまや世界の多くの人々によって共有されつつあるように思われる³²。スポーツが人権の問題であるならば、ジェンダー変更もまた個人のアイデンティティの根幹にかかわる深刻な決断であり、それゆえに現代社会における基本的人権の問題であろう³³。こうした2つの人権の意義を徹底して追求すれば、ある選手が男性→女性→男性というデイトランジションを経る可能性を不当と糾弾すること、そして女子エリートスポーツという枠組みを従来通り自明視すること自体が、人権をめぐるフェアネスに著しく悖る営為ではないだろうか。さらに言えば、男性→女性→男性というデイトランジションを選ぶ存在が「架空のシスジェンダー男性」にすぎないと想定するのも、ジェンダー・バイナリーを無批判に前提とする点で、一種の偏見であることを免れまい。

本稿の冒頭でも触れたが、レズビアン選手としてのナブラチロワに関する、日本語圏での先行研究は数少ない。その数少ない研究の一つでは、ナブラチロワの先駆性について、以下のように論じられている。

1990年代にはいと、セックスとジェンダーとセクシュアリティが一つの線上に繋がりをもつものであり、セックスがジェンダーやセクシュアリティの基盤であるという信念に疑問が投げられた。現代では、むしろジェンダーが先行し、セックスやセクシュアリティを規定しているという論理が主流と成りつつある……そして、自然界のグラデーションに対し、人間の二元論的思考回路を当てはめたセックス (オス VS メス) やセクシュアリティ (異性愛指向) もまた構築されたものであるという考え方が支配的になっている。1990年代後半になり、漸く……マルチナのセクシュアリティ (性的指向) を許容する時代が来たと言えるのではないだろうか³⁴。

上に引用したのは2003年に出版された論文の一節であり、レズビアン選手としてのナブラチロワの意義を強調する主張も、現在ではいささか古びた観があることは否めない。「むしろジェンダーが先行し、セックスやセクシュアリティを規定しているという論理」は、21世紀初頭の約20年の間に着実に普及し、そうした潮流の必然的な延長として、マッキノンに代表されるようなト

ランス女性選手の主張が世に現れ、さらにはトランス女性が女性であり続けることの基盤たるジェンダー・バイナリー概念までもが、いまや一種の黄昏を迎えつつあるように見える。ナブラチロワの発言を契機とした一連の論争は、このような時代の変化の最中に浮上した重大な争点を、競技上のフェアネスを目指すという彼女自身の意図を越えて、図らずも明確化してしまった一つの実例であると、私としては捉えている。

(謝辞) 本論文は、2022年度日本比較文化学会東北支部研究大会(仙台市戦災復興記念館, 2023年3月21日)における筆者の研究発表「寛容であること, インクルーシヴであること, フェアであること——トランスジェンダー選手に関するナブラチロワの発言をめぐる——」の原稿を、大幅に加筆修正したものである。当日は参加者の方々から様々なコメントを賜り、特に横地徳広氏からは、改稿に際して有益と思われる参考文献のご教示があったものの、遺憾ながら今回はそれを十分に活かすに至らなかった。ここで横地氏ならびに他の方々からのコメントに改めて感謝し、横地氏のご助言については改めて今後の課題としたい。

注

- 1 ナブラチロワのカミングアウトは完全に自主的な決断とは言えず、これに先立つ *New York Daily News* 紙によるアウティングをきっかけとするものであった。ナブラチロワは1981年7月20日に米国市民権を得るが、その直後のマスコミの電話取材で、自身がバイセクシャルだと認めた。(後に彼女はみずからのセクシュアリティについて、バイセクシュアルではなくレズビアンであると訂正している。) 彼女は取材に対して「話せば他の人々の模範になると思うが、今ではない」と報道の自粛を求めたものの、同年7月30日、同紙は報道に踏み切った。(Rogers, Destiny, 2022. "After Martina Navratilova outed, AVON stops calling." *QNews LGBTIQ+ News*, July 30, 2022. <https://qnews.com.au/on-this-day-after-martina-outed-avon-stops-calling/>.) ナブラチロワはこれについて、「私の身の安全や幸せよりも優先すべき事柄を有する記者に対して、自分の本心を漏らしたのは相手の思う壺であり、愚かであった。しかし、これも一つの経験である。私は報道陣に対して常に率直であったが……あの一件以降は、あまり打ち明け話をしないようになった」と回顧している。(Navratilova, Martina, and George Vecsey, 1985. *Being Myself*. Collins: 205.) なお、拙論中の日本語訳は特に注記や翻訳の提示が無い限り、すべて筆者によるものである。
- 2 Donna Lopiano's comments to ESPN, cited in Ennis, Dawn, 2020. "Celebrating LGBTQ sports history: The complicated champion Martina Navratilova." *OutSports*, October 30, 2020. <https://www.outsports.com/2020/10/30/21541354/celebrating-lgbtq-sports-history-martina-navratilova-tennis-lesbian-transgender-inclusion/>.

- 3 Clarke, Gill. "Outlaws in Sport and Education? Exploring the Sporting and Education Experiences of Lesbian Physical Education Teachers." in Scraton, Sheila, and Anne Flintoff. 2002. *Gender and Sport: A Reader*. Psychology Press: 217. もっとも、テニス界におけるナブラチロワの地位は、この時点ではすでに盤石となっており、カミングアウトは彼女の活動にとっての致命傷とはならなかった。むしろ、この一件はナブラチロワ個人よりも、レズビアンである数多の他の選手への潜在的な影響が甚大であり、彼女たちは自身の選手生活の破滅を恐れて、レズビアンとしてのセクシュアリティを懸命に隠し通すことに繋がったという (Clarke, 217)。
- 4 Tredway, Kristi. 2019. *Social Activism in Women's Tennis: Generations of Politics and Cultural Change*. Routledge: 90.
- 5 Zeigler, Cyd. 2021. "Martina Navratilova reflects on her advocacy, the March on Washington, trans athletes and more." *OutSports*. September 22, 2021. <https://www.outsports.com/2021/9/22/22661579/martina-navratilova-gay-lgbtq-advocacy-march-washington-tennis-trans-athletes/>.
- 6 岡田桂「はじめに」, 岡田桂・山口理恵子・稲葉佳奈子. 2022. 『スポーツと LGBTQ +』. 晃洋書房: ii.
- 7 ナブラチロワは本稿で扱った問題に加えて、トランスジェンダー選手のスポーツ参加について現在にいたるまで継続的に発言を続けており、この検索結果には、本論文で扱った論争意外のものも含まれると判断される。その点を割り引くにせよ、上記のヒット数には、トランスジェンダー問題に関するナブラチロワの発言の影響の大きさが看取できよう。
- 8 BBC. 2019. "The Trans Women Athlete Dispute with Martina Navratilova," June 26, 2019. <https://www.bbc.co.uk/programmes/m00069nr>. この番組は現在、BBC ウェブサイトでは視聴不能であり、筆者も未見である。なお心理学者のアビー・バラスは本番組の内容を、トランス女性を疎外する「ありがちなトランスフォビア (mundane transphobia)」の発現として、批判的かつ詳細に検討している。詳しくは以下を参照: Barras, A. 2019. "'We just want to be listened to,' Mundane Transphobia in BBC1's 'The Trans Women Athlete Dispute with Martina Navratilova'." *British Mensa's ANDROGYNY*. <https://research.brighton.ac.uk/en/publications/we-just-want-to-be-listened-to-mundane-transphobia-in-bbc1s-the-t>.
- 9 この問題に触れた商業出版物として、例えば以下の2つが挙げられる: 松浦大悟. 2021. 『LGBTの不都合な真実 活動家の言葉を100% 妄信するマスコミ報道は公共的か』. 秀和システム; ケント・ギルバート. 2022. 『米国人弁護士が見た変容するアメリカ現代史——銃・中絶・移民・戦争』. 扶桑社。またアカデミックな著作としては、前掲の『スポーツと LGBTQ +』の第8章の岡田桂「スポーツにおける LGB 主流化と T (Q+)」182-183に、本件についての短い言及があるものの、分析は断片にとどまっている。
- 10 飯田貴子. 2003. 「異性愛主義に立ち向かった二人のウィンブルドン覇者〜ビリー・ジーン・キング & マルチナ・ナブラチロワ〜」, 海老原修. 2003. 『現代スポーツ社会学序説』. 杏林書院。

- 11 2021年開催の東京オリンピックは、このような流れを増進すべき大きな契機であったはずだが、「オリンピック史上最多の性的マイノリティ参加選手数が言祝がれる中で、その開催地である日本からの明示的な参加が0で終わったという矛盾」(岡田「スポーツにおけるGB主流化と(Q+)」,91)は、その後も看過され続けてきたように思われる。
- 12 Navratilova's Twitter post, December 19, 2018, cited in Clarendon, Dan, 2018. "Out tennis star Martina Navratilova accused of transphobia following shocking tweet." *Queerty*. December 27, 2018. <https://www.queerty.com/tennis-star-martina-navratilova-accused-transphobia-following-shocking-tweet-20181227>. 以下、本稿執筆時点においてウェブ上で入手可能であったナブラチロワのツイートについては、直接リンクを明示するが、そうでなかったものについては再引用の形で掲載し、引用元となった記事あるいは論文の出典を示す。
- 13 Magowan, Alistair. 2018. "Transgender women in sport: Are they really a 'threat' to female sport?" *BBC*, December 18, 2018. <https://www.bbc.com/sport/46453958>.
- 14 Knott-Fayle, Gabriel, Elizabeth Peel, and Gemma L. Witcomb. 2023. "(Anti-)feminism and Cisgenderism in Sports Media." *Feminist Media Studies* 23 (3): 1279. <https://doi.org/10.1080/14680777.2021.1992644>.
- 15 Navratilova's Twitter post, December 19, 2018, cited in Clarendon.
- 16 IOC Medical Commission. 2003. "Statement of the Stockholm consensus on sex reassignment in sports." https://stillmed.olympic.org/Documents/Reports/EN/en_report_905.pdf.
- 17 International Olympic Committee. 2015. "IOC Consensus Meeting on Sex Reassignment and Hyperandrogenism." https://stillmed.olympic.org/Documents/Commissions_PDFfiles/Medical_commission/2015-11_ioc_consensus_meeting_on_sex_reassignment_and_hyperandrogenism-en.pdf.
- 18 Navratilova's Twitter post, December 21, 2018, 10:09am. https://twitter.com/martina/status/1075921080991256581?ref_src=twsrc%25Etfw&lang=fr.
- 19 Navratilova. 2019. "The rules on trans athletes reward cheats and punish the innocent." *The Sunday Times*, February 17, 2019, <https://www.thetimes.co.uk/article/the-rules-on-trans-athletes-reward-cheats-and-punish-the-innocent-klrsq6h3x>.
- 20 International Olympic Committee. 2023. *Olympic Charter*. Maison Olympique: 8.
- 21 Navratilova, "The rules on trans athletes reward cheats and punish the innocent."
- 22 Rachel McKinnon's Twitter post, cited in Clarendon. マッキノンのアカウントは現時点ではいわゆる鍵付き(非公開)の状態となっており、また彼女の当時のツイートの大半は削除されている。マッキノンはナブラチロワの件を含めて、その後も攻撃的なツイートを連発したせいで、ツイッター側にアカウントを凍結されたこともあり、また本人が後にヴェロニカ・アイヴィーと改名し、新たなアカウント(こちらも現時点では鍵付き)で活動するようになったこともあり、彼女自身の言葉遣いを検証できる一次資料としてのツイート原文の多くは、現在、ウェブ上での

- 入手が困難となっている。ただし、ツイッター上での彼女のナブラチロワ叩きを論じた二次資料の中には、マッキノンのツイートからの引用は相当数残されており、本稿ではそうした資料からマッキノンのツイートの抜粋することで、上述の資料的な制約を補っている。
- 23 Navratilova, “The rules on trans athletes reward cheats and punish the innocent.” なお「あなたのアカウントをブロックはしないけれども」と述べていたナブラチロワであったが、本文中のカッコ内では “though I later did, because who wants all that negativity” と付言して、自身のアカウントからマッキノンに後にブロックしたことを認めている。
- 24 Navratilova, “The rules on trans athletes reward cheats and punish the innocent.”
- 25 Athlete Ally. 2019. “Athlete Ally: Navratilova’s Statements Transphobic and Counter to our Work, Vision and Values.” *Athlete Ally*. February 19, 2019. <https://www.athleteally.org/navratilovas-statements-transphobic-counter-to-our-work-vision/>.
- 26 岡田「スポーツにおけるGB主流化と(Q+)」,82-183。
- 27 Greenwald, Glenn. 2020. “How ‘Cancel Culture’ Repeatedly Emerged in My Attempt to Make a Film about Tennis Legend Martina Navratilova.” *The Intercept*. July 14, 2020. <https://theintercept.com/2020/07/14/cancel-culture-martina-navratilova-documentary/>.
- 28 こうした実例として、まず思い浮かぶのはレネー・リチャーズ (Renée RICHARDS) であろう。リチャーズは眼科医でもある元プロテニス選手で、男性から女性への性別適合手術の後、1977年の全米オープン以降は女子選手として活躍する。リチャーズは現役を引退した後はナブラチロワのコーチに就任し、ウィンブルドン選手権におけるナブラチロワの2度の優勝に貢献した。
- 29 Greenwald, “How ‘Cancel Culture’ Repeatedly Emerged.”
- 30 Riseman, Noah. 2019. “Martina Navratilova says trans players are ‘cheats’, but she was coached by one.” *ABC News*, February 19, 2019. <https://www.abc.net.au/news/2019-02-19/martina-navratilova-says-trans-players-cheats-she-beat-first-one/10825100>.
- 31 McKinnon’s Twitter post, cited in Clarendon.
- 32 これはジョグジャカルタ原則 (2006年) 第3原則 (The Yogyakarta Principles, Principle 3) からの引用であり、原文は以下で閲覧できる: <https://yogyakartaprinciples.org/principle-3/>。ジョグジャカルタ原則は性的指向そして性自認における人権上の様々な課題を提起した文書であり、2006年11月、インドネシアのジョグジャカルタに人権諸団体が集まり開催された国際会議のまとめとして公表された。キャスリン・ストック (Kathleen STOCK) は、いわゆる「ジェンダーアイデンティティ理論」(ある人を男性あるいは女性あるいはノンバイナリーとする決定因は、生物学的性別ではなく当人の内面にあるジェンダーアイデンティティであり、そうしたアイデンティティは社会のあらゆる場で承認・保護されなければならないという主張と、その根拠たる理論体系) の発展と拡散が現代の一大文化現象と化していると指摘し、そうした現象を生み出すに至った重要局面の一つとして、ジョグジャカルタ原則を歴史的に位置づけている。詳し

くは以下を参照：キャスリン・ストック、2024. 『マテリアル・ガールズ：フェミニズムにとって現実はなぜ重要か』。慶應義塾大学出版会（原著は Stock, Kathleen, 2021. *Material Girls: Why Reality Matters for Feminism*, Fleet.）。

- 33 2015年のIOC合意声明を上書きする形で発表された、2021年のIOCフレームワークは、こうした2つの葛藤する要素を、少なくとも理念の次元では折衷しようとした内容になっている。同フレームワークは冒頭で、「万人が差別を受けること無く、健康や安全や尊厳を尊重する在り方で、スポーツを実践する権利を有する」と宣言しているものの、他方で「競技スポーツの信頼性——とりわけ、高度に組織されたスポーツ競技——の信頼性は、どの選手も他の選手に対してアンフェアあるいは不均衡な優位性を持つことの無い、公平な競技の場 (a level playing field) にかかっている」とも特記されている。ここで私が「少なくとも理念の次元では」と書いたのは、同フレームワークが競技参加資格の有無の判断を、「説得力があり、かつピア・レビューを受けた研究」といった「エビデンスに基づくアプローチ」に委ねることにとどまっているからである。いわゆる「エビデンス」に拠りつつ議論することには、おそらく誰も反対しないであろうが、それは議論の手順に限定される話であり、そもそも万人にとっての「公平な競技の場」とは何なのか、というトランス問題が人々に突きつけた難問は、事実上、ここでも先送りされたままのように思われる。同フレームワークの全文は以下を参照：International Olympic Committee. 2021. “IOC FRAMEWORK ON FAIRNESS, INCLUSION AND NON-DISCRIMINATION ON THE BASIS OF GENDER IDENTITY AND SEX VARIATIONS.” <https://stillmed.olympics.com/media/Documents/Beyond-the-Games/Human-Rights/IOC-Framework-Fairness-Inclusion-Non-discrimination-2021.pdf>.

- 34 飯田「異性愛主義に立ち向かった二人のウィンブルドン覇者」、62。

Navratilova on Trans Issues: Fairness and Gender Conflicts in Women's Elite Sports

Yutaka ITO

Martina Navratilova is a tennis legend and a pioneering lesbian athlete in elite sports. When she came out in 1981, Navratilova faced a huge social backlash and ended up losing her most important sponsors. Her decision to come out was a turning point, and she would later become widely known as a lesbian activist beyond the sports world.

Against such a backdrop, Navratilova dared in 2018 to openly criticize transgender athletes in women's elite sports. She has since made similar controversial statements, often sparking heated debates. Advocating for fairness in sports, Navratilova claims transwomen athletes enjoy unignorable physical advantages from their de facto biological manhood even after undergoing hormone therapy. Many critics have found her remarks highly offensive, accusing her of transphobia.

This paper discusses Navratilova's views on transwomen athletes in elite sports competitions (such as professional games and the Olympics) and the controversies she has courted. The author identifies the focal points of contention between Navratilova and her critics and analyzes its connotations concerning fairness and gender issues in women's elite sports.